

ドキュメンタリー番組のナレーション

～ナレーションの役割および収録の実際～

● 広瀬修子

放送番組のナレーションは、どのような役割を果たすべきものなのか。この小文は、ナレーション収録の実際を紹介しながら、放送番組、特にドキュメンタリー番組におけるナレーションの役割などについて、ナレーションを担当する語り手（ナレーター）の立場から述べようとするものである。

ポスト・プロダクション

番組制作は、通常「企画」「取材」「編集」「仕上げ」というプロセスを経て行われ、ナレーション入れは、番組の仕上げの段階で行われることになる。

現場取材・素材収録など、狭い意味でのプロダクションを終えてからの一連の作業を、ポスト・プロダクション（ポス・プロ）と呼ぶが、収録済み素材テープの編集、効果音・音楽入れ、ナレーション入れ、テロップ（スーパー）入れなどが、このポスト・プロダクションにあたる。

[編集]

番組時間の数十倍、あるいはそれ以上の長さの、収録済みテープの1カット、1カットを綿密にチェックしたうえ、それを切ったりつないだりして構成していく「編集」は、極めて集中力と忍耐力を要する仕事である。番組のテーマやメッセージをよりの確に伝えるために、何を捨て何を残すか、どのような流れにするか、編集者とディレクターが、素材

テープの山と格闘しながらの、密度の高い時間が続く。編集作業には、粘り強さ・綿密さ、さらに思い切りのよさが、不可欠だといえる。

収録済みの素材を1本のテープにつないただけで、音楽や効果音、ナレーションなどを、一切加えずに番組が成立するケースも、全くないわけではないが、多くの場合は、情報や番組メッセージを伝えるナレーションや、効果音・音楽を加える音響デザインが必要とされる。映像に、効果音や音楽、ナレーションによる「意味」が加えられて画面が息づき始め、番組に、いわば命が吹き込まれることを目指すわけである。

[音響デザイン]

番組は、通常、いくつかのシークエンスからできあがっている。シークエンスとは、いくつかのシーンを寄せ集めたひと続きの画面のことである。そのシークエンスとシークエンスを区切り、いわば番組の段落をはっきりさせる役目、番組を分節化する役目を負っているのが音響デザインなのである。たとえば、シークエンスごとに音楽や効果音を変えたり、音楽を付加したシークエンスのあとに音楽なしのシークエンスを配置するなどして、番組の段落や構成をはっきりさせ、視聴者の理解を助ける役割を果たすわけである。また、番組に情感・情緒を加えるための音楽を付けることも音響デザインの仕事のひとつである。

効果音や音楽は、語り手にとって、いわば強い味方である。いわゆる朗読の場合は、通常、語り手の声だけで、段落、作品の構造・組み立てなども表現しなければならないが、番組のナレーションでは、その役割を映像とともに、音響デザインがしっかりと担ってくれるからである。

ナレーション収録のプロセス

1) 準備・打合せ

ナレーションを受け持つナレーター(語り手)の仕事は、番組のナレー

ション担当が決定した時点から始まる。まず、企画書によって番組のねらいやその概要を知ったうえで、ディレクターやプロデューサーと打ち合わせをし、取材や編集の進捗状況などを把握する。もちろん、予め編集段階での素材を見ておくことも、番組の内容や制作者の意図を深く知るための大きな助けになる。また、時間的余裕があれば、テーマに関連した資料を読んだり、疑問点について調べたりすることも大事なことである。

※番組制作のスタートになる企画は、NHKの場合、A4用紙1枚の企画書(提案票)によって提出される。それが、どんなに大型の特集番組であっても、企画書はA4用紙1枚というのが決まりである。企画書には、番組のねらい・テーマ、番組の概要、構成のほか、放送予定日、取材地、取材期間、制作費などが記される。

2) コメント原稿の完成

最終版(準最終版)のコメント原稿が完成するのは、殆どの場合、収録の前日であり、深夜や収録当日の早朝になることも珍しくない。

語り手は、コメント原稿と編集済みテープとを合わせて見たうえで、コメントの字句を一語一語チェックしていく。文字を見ずに耳で聴くだけでは理解しにくい用語はないか、表現の気になるところ、引っかかるところ、映像と合わないところ、疑問点、さらに文法的な誤りはないか、表現が日本語として正しいかどうかなどを点検し、コメントの代案を用意する。

3) 収録当日、リハーサル前の打ち合わせ

語り手が「問題あり」と考えるコメントについて、ディレクターやプロデューサーと検討し、その他の修正箇所、訂正個所の確認などを行う。

4) リハーサル (テスト)

効果音や音楽が付け加えられた映像とナレーションを合わせてみるため、リハーサルを行う。このとき、全編をいくつかのパートに分けて、リハーサル、コメント手直し、本番を繰り返すやり方もあるが、一度、全編を通してリハーサルをする方が、番組の構成や流れを確認しながら、作業を進められるメリットがある。

多くの場合、語り手はリハーサルのときに、初めて音楽や効果音を聴くことになる。本番でどう語るかを決めるために、リハーサルで語りながらこの音楽や効果音をしっかりと聴くことは、語り手にとって大事なことである。

リハーサルでは、映像に対してコメントの内容や長さが適切かどうか、さらに、音楽・効果音、ナレーションの配置や相互のバランスなどが細かくチェック・検討される。

5) コメントの再検討

リハーサルのあと、ナレーション・コメントをもう一度、一語一語チェックし直す。特に、映像とコメントがしっくりしない箇所は、再度、検討し、ことばの選び方、言い回しその他の日本語表現について、今一度、念入りに、丁寧に、時間をかけて推敲を行う。

6) ナレーション本番

本番もリハーサルと同様、いくつかのパートに分けて行うこともあるが、番組の流れや勢いを大切にするためには、できるだけ通しに近い形で収録を行う方が、より望ましいと考えられる。

ナレーションの語り手は、番組の最終表現者である。ディレクター、プロデューサー、編集マン、音響デザイナー（効果マン）、音声マン、さらに、カメラマンをはじめとする取材スタッフ、その一人ひとりが番組に込めた思い、投入したエネルギーをしっかりと受けとめながら、番組

の最終的な形を作り、番組のメッセージや番組の「思い」を視聴者に確実に送り届ける役目を担っていると言えよう。

映像と音楽・効果音、ナレーションが一本化され、さらにテロップ（スーパー）入れが終了すると、番組はようやく完成することになる。

ナレーションの役割

ナレーションにおいて、まず必要なことは、言うまでもなく、コメントの意味が、きちんと伝わることである。放送という場面で、何かを伝えようとする場合、一度だけ一方的に伝えるだけで、意味内容がしっかり伝わること、聞き返すことや質問することができなくても、内容がきちんと伝わるのが前提条件であり、これは、勿論、番組のナレーションについてもあてはまることである。

（発音が明瞭であることや、発声が自然で、声が聴き手にきちんと届くこと、理解しやすいテンポ、間など、音声表現の基本的なことについては、ここでは触れないことにする）

読んで意味内容を伝える際に大切なことは、「意味どおりに読む」ことである。このことは、至極、当然のことに聞こえるかもしれないが、放送番組を見ていると、コメントの意味を、意味どおりに読んでいないナレーションが少なくないのに気づかされる。

日本語の場合、意味を伝えるための決め手になるのは、音の高低であり、イントネーション・抑揚である。そのため、ことばで何かを伝えようとするとき、意味どおりのイントネーションで伝えることができるか否かが、重要なポイントになる。イントネーションが的確でなければ、文章の意味内容は正しく伝わらないということになる。

（意味を伝えるイントネーションの基本は、前号で朗読について述べたことと同様なため、ここでは繰り返さない）

番組の構成をしっかり把握しながら、番組に流れを作っていくことも、ナレーションの重要な役目である。語り手は、ナレーションによって、

主体的に番組を進め、展開させていかなければならない。そのためには、見やすい構成表を作成して、手元に置き、流れやシークエンスを確認しながら語っていくのもよい方法である。

ニュースなどとは違って、ドキュメンタリー、特に、いわゆるヒューマンドキュメンタリーには、エモーショナルな要素が加わってくることが少なくない。このとき大事なことは、情緒や感動を押しつけないことである。あるシーンにどんな表現が適切かは、ケース・バイ・ケースであり、表現者の人間としてのセンスが深く係わってくるとしか言いようがない。しかし、多くの場合、抑制の利いた表現の方が、かえって感動を生むと言えるかもしれない。情緒を表面的にまぶすような表現や余分な思い入れは耳障りである。番組を見る人は、語り手の感動を聞きたいのではなく、番組の内容そのものから生まれる感動を体験したいのである。

音楽とナレーションの関係も十分考慮しなければならない。音楽をしっかりと聴きながら語ることは肝心だが、音楽に乗りすぎてしまうと、語るのではなく、いわば歌ってしまうおそれがあり、ことばの重み、コメントの意味は十分に伝わらなくなってしまう。この点には特に注意が必要である。

これまで、ナレーションについて、さまざま述べてきたが、ナレーションで最も大切なことは、番組の内容、ねらい、そして番組のメッセージを聴き手にしっかりと伝えることである。語り手が、十分に理解していないこと、深く思っていないことは、決して聴き手に伝わることはない。コメントの一つ一つに込められた意味や、制作者の意図、番組のメッセージを、語り手がきちんと把握することによってこそ、ナレーションのインパクトは生まれる。コメントのリアリティー、ナレーションの説得力は、そこからしか生まれないのである。ただ音声化されただけの虚ろなことばは、聴き手の心に訴える力を持ち得ないことは言うまでもない。

時間的なゆとりがあれば、番組のテーマについて、深く理解するため

に、資料を読むなどして準備することも必要なことである。そうした努力が、番組の「思い」やメッセージを、是非とも聴き手に伝えたい、強く訴えたいという、語り手の意欲・モチベーションにつながっていくことになるからである。

ことばの一つ一つを、語り手がどれだけ自分のものにして語っているか。語り手の人間としての経験、さまざまな蓄積、ものの見方、考え方、人間性、これらのすべてがその表現で問われるとも言える。

ナレーションがめざすべきこと、それは、ナレーションがまさに「番組の声」になること、つまり、知性と感性に支えられた、番組にふさわしい声で、番組のメッセージや番組の「思い」を伝え切ることではないだろうか。

最後に、筆者が以前に新聞に書いた文章から、スタジオでの語り手の様子や気持ちのあり様を読みとっていただければ幸いである。

コメント練り直しに十数時間

広瀬修子

ドキュメンタリーなどのナレーションの仕事がある時には、きょうも夜中になるかもしれないと覚悟を決めてスタジオに入る。語り手としてマイクの前にいる時間も決して短くはないが、私たちの場合は、スタッフみんなで行うナレーションコメントの再検討に、その何倍ものエネルギーを使うことが多い。

コメントが、筋道だった文章になっているか。文法におかしいところはないか。言葉の使い方に誤りはないか。そして何より、番組のねらいや、制作者の思いを伝えるのに必要十分なコメントになっているかなどを、字句の一つ一つについて検討していく。

このコメント練り直しには、しっかり時間をかける。スタジオに缶詰

めになったまま、コメントの念入りな検討→リハーサル→コメント修正→本番を繰り返す。息つくひまもなく、結局十数時間！などということもまれではない。

丑^{うし}三つ時を過ぎ、やがて外が白みかけても、スタジオという密室では外の様子は全くわからない。動き続ける時計の針と、体やのどの疲労感が時間の経過を知らせてくれるだけである。

もちろん、コメントはスタジオ入りの前にひとまず完成してはいるのだが、このように、再度念入りな手直しを行うのが普通である。わずかな数十秒のコメントに一時間、二時間と議論が続くこともある。少しでもよい番組にしたいとみんなの気持ちが一つになる時でもある。

マイクの前ばかりでなく、この打ち合わせでも結構声を使っているらしく、ついには声はゴソゴソ、ろれつも十分まわらなくなる。語り手としては最悪のコンディションである。

しかし多くの場合、こうした手直しの過程で、この番組で何を伝えるべきかが、より明確になってくるものだ。長い打ち合わせの時間は、番組の「思い」が、語り手の中にしみ込んでいくための時間なのかもしれない。伝えるべきことが、語り手の中でしっかり捉えられているかどうか、それがナレーションのインパクトの決め手になる。

番組の中で、何を思い、何を考え、何を表現しようとしているのか、語り手は、人間としてのセンスを問われているような気がする。

ナレーションは私の好きな仕事ではあるが、同時にこわい、そしてしんどい仕事である。